

フランス語 Yes/No 疑問文におけるイントネーション

青木 大輔
Daisuke AOKI

要旨

本稿は、フランス語母語話者による自由会話コーパスを用いた実験を通して、Yes/No 疑問文（以下YNQ）のイントネーション特徴を明らかにし、その音声特徴を記述することを目的としている。まず、第2章で疑問文とイントネーションに関する複数の先行研究を概括する。背景として、Conveney (2002)の社会言語学的研究によりYNQにおける非常に多様な伝達機能が挙げられている。またYNQの韻律研究はGrundstrom (1973)、Fontaney (1991)、Marandin et al. (2004)の3つを挙げている。この3つの共通点は疑問文イントネーションを、会話コーパスを用いて分析していることである。それぞれの研究において疑問文と肯定文の関係が必ずしも上昇調vs下降調の対立を引き起こすことはないという仮説のもと、文脈と発話者のインタラクションを考慮した語用論的分析が行われた。しかしながら、これまでフランス語YNQのイントネーションパターンの記述を定量的かつ定性的に行った包括的な研究は見られなかった。また、GrundstromとFontaneyで言及されていた疑問マーカ *marque de l'interrogation* についても十分な研究はなされてきていない。このような現状を鑑み、本研究では東京外国語大学フランス語話し言葉コーパス（エクサンプロバンス）を活用し、実験を行った。

本論の第3章では先行研究にて指摘された問題について再度言及しながら、本研究のリサーチエスチョンについてまとめる。つまり、フランス語YNQでは上昇調と非上昇調のトーンがどのような頻度かつ文脈で現れるのか。そして、*hein*を含む疑問マーカの種類をどのように分類し、そのイントネーションパターンによってカテゴリー構築ができるかどうか。イントネーションの記述はMertens (2004, 2006)を参考にし、筆者の聴覚的判断と、音声分析ソフトPraat上でスクリプトProsogramを活用した音声音響分析を並行して遂行された。第4章では実験の目的、実験方法、分析方法、実験結果について確認したうえで、文末最終アクセントのトーンと疑問マーカの分析を行った。その結果、文末最終アクセントについては、非上昇調イントネーション（LL、HLトーン）と上昇調イントネーション（HH、LHトーン）の割合がおおよそ1:2となった。また、疑問マーカについては、本研究で分析された5つにおけるそれぞれ固有のイントネーションパターンが観察された。上昇調(l h)のnon、*n'est-ce pas*が「肯定文+付加疑問」型になる一方で、選択疑問文と類似した特徴を持つou、ou pasについては、

あおきだいすけ：英語科教諭

キーワード：フランス語、音声学、イントネーション

「へ」の字型のイントネーションパターンが観察された。そして、heinのイントネーションパターンは平板型(l l)と(h h)の2通りで、Mertensの定義したappendixのトーンパターンと一致した。追実験として同コーパスの肯定文を抽出し分析したところ、非上昇調が上昇調よりも高い頻度で現れたが、上昇調も27例中10例見つかった。その理由として、話し言葉コーパス特有の発話文の未完了性が影響していると考えられた。

以上の実験を通して、フランス語YNQは上昇調ではない非上昇調のトーンによって疑問の特徴を伝えられることが再確認された。一方で、確認の疑問文verifying questionを含めたLLトーンなどの非上昇調イントネーションも多いことが定量的に解明された。また、今まで明らかにされなかったフランス語疑問マーカ―はそれ自体が1つのイントネーショングループ(GI)を構築していることが認められた。その中でもheinは唯一appendixの特徴を持ち、文中の挿入inciseのパターンを表すなど他とは極めて異なることも明らかとなった。

しかしながら、このフランス語疑問文におけるイントネーション研究にはまだ多くの課題が残されている。まずコーパスについて、転写方法に注意し、より語彙数と疑問マーカ―を増やした総合的な研究が急務である。さらに、今回分析対象となった文末イントネーションのみでなく、文中のイントネーションまで分析の範囲を広げたマクロな研究が期待される。

目次

1. 序論	5
2. 先行研究	6
2.1. フランス語YNQの社会言語学的研究：Coveney（2002）	6
2.2. フランス語YNQの韻律研究	7
2.2.1. Grundstrom（1973）	7
2.2.1.1. 疑問文とピッチ曲線の相関	7
2.2.1.2. 上昇調の文における強さと長さ	8
2.2.1.3. 文末における付加疑問文の意味	9
2.2.2. Fontaney（1991）	9
2.2.2.1. コーパスと分析方法	9
2.2.2.2. 疑問文の分類方法	10
2.2.2.3. 下降調イントネーションのYNQ	10
2.2.2.4. 疑問マーカ－の hein	11
2.2.3. Marandin et al.（2004）	13
2.2.2.1. 下降調イントネーション	13
2.2.2.2. 上昇調イントネーション	15
2.2.2.3. 上昇下降調イントネーション	16
3. リサーチクエスチョン・イントネーションの記述	18
3.1. リサーチクエスチョン	18
3.2. イントネーションの記述：Mertens（2004, 2006）	18
4. 実験	21
4.1. 実験の目的	21
4.2. コーパス	21
4.3. 分析方法	21
4.4. 結果	22
4.4.1. 統語カテゴリー	22
4.4.2. 最終アクセント	23
4.4.3. 疑問マーカ－	23
4.5. 分析	24
4.5.1. 最終アクセント	24
4.5.1.1. 非上昇調：LL	24
4.5.1.2. 非上昇調：HL	25
4.5.1.3. 上昇調：HH	26

4.5.1.4. 上昇調：LH	27
4.5.2. 疑問マーカー	28
4.5.2.1. non	29
4.5.2.2. hein	30
4.5.2.3. ou pas	31
4.5.2.4. ou	33
4.5.2.5. n'est-ce pas	33
4.6. 肯定文のイントネーション	33
5. 議論・考察	35
6. 結論	37

1. 序論

本稿は、フランス語母語話者が発音する自由会話コーパスを用いて、Yes/No 疑問文（以下 YNQ）のイントネーション特徴を明らかにし、その音声特徴を記述することを目的とする。フランス語疑問文のイントネーションに関する研究は1970年代から複数行われてきた。しかし、それらは分析者による聴覚的判断に頼ったものであり、そのうえ定量的な分析が久しく行われていなかった。一般的にフランス語には Wh 疑問文（以下 WHQ）と YNQ の2種類がある。音声学的には、両疑問文には異なるイントネーションパターンがあることが一般的に認められている。その上、フランス語母語話者によると文末のイントネーションを上昇調にすることで肯定文を疑問文に変えることができる。次章の先行研究でも上昇調と下降調、疑問文と肯定文それぞれに相関があるとされている。しかし、上昇調イントネーションが常に疑問を意味しないということも確認されている。本研究では後述する『21世紀COE「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」』の枠組みの中収集・構築された、フランス語話し言葉コーパス（エクサンプロバンス、2010）を使用した¹。これにより多数のインフォーマントに発話された様々な内容についての対話を用い、より個人差を考慮した多角的な考察ができる。

本論を進めるにあたり、まず第2章ではこれまでに YNQ のイントネーションについて関連のある先行研究を概観する。その中でフランス語における YNQ とイントネーションの関係性を明らかにしつつ、その実験方法や結果について確認する。第3章では先行研究の問題点を挙げつつ、本研究でのリサーチクエスチョンとイントネーションの記述方法を説明する。第4、5章ではコーパスから抽出した YNQ の最終アクセント（文末のイントネーション）と文末の疑問マーカーの音響音声学的分析により、YNQ を特徴づける要素について議論・考察する。

1 コーパスの1部がホームページ上で公開されている (http://www.coelang.tufts.ac.jp/multilingual_corpus/fr/)。

2. 先行研究

2.1. フランス語YNQの社会言語学的研究：Coveney（2002）

フランス語研究において近年注目されてきた「話し言葉」研究は統語論から語用論までと様々な分野で取り組まれている。Blanche Benveniste（1997）を始めとするGARS（Groupe aixois de recherches en syntaxe）の研究では特に話し言葉のできる限り大きなコーパスを構築し、多種多様な言語試料を入手し、定量的な調査を行っている。Coveney（2002）の第2部では（第1部は否定について）その話し言葉における全体疑問文YNQと部分疑問文（以下WhQ）を統語的、社会言語学的、語用論的に観察している²。

Coveneyのコーパスはフランスのピカルディー地方で行われた林間学校にて録音された。彼は自身が指導員として参加し、30名のインフォーマントへインタビュー形式で調査を行った。まず、予想されたYNQの形は倒置型（以下VS型）、est-ce que型（以下ESV型）、イントネーション型（SV型）の3パターンであった。それぞれの出現頻度はVS = 0%、ESK = 21%、SV型 = 79%（N = 180）という結果になった。SV型においては文末等に付与される疑問詞マーカーと考えられるhein, non, n'est-ce pasはYNQのバリエーションから除外されている。また全コーパス中のYNQは分析対象となったYNQと分析から除外された範疇YNQに分類された。Coveneyのコーパスの180文の中で最終的に分析対象となったのが109文であった。付加疑問文の場合には動詞voir, savoir, comprendreがある。これは「聞き手に対して何かを尋ねているのではなく、会話を維持するための機能」とされている。同様に、エコー疑問文echo questionも対象外である³。最後に、Coveneyは典型的な3つの伝達機能Communicative Function（以下CF）を持つ疑問文は範疇YNQとして完全に除外している：1）代名詞主語tu, vousを伴った行為の依頼request for actionを意味する疑問文、2）提案suggestionを意味し、動詞が様態動詞（pouvoir, devoirなど）でない疑問文、3）与えられた情報を強調するための発話post-announcement⁴。

以上の範疇疑問文を考慮した後、次の段階として疑問文の意味と機能によって全109文のYNQにCFを付与している。これによって疑問文における語用論研究に基づいた発話内行為にも言及できている。一方で、課題もいくつか挙げられている。まず、コーパスの種類による社会言語学的研究の限界があり、より広い年齢層や社会階級などが望ましい。また、CFを疑問文に付与する際にネイティブチェックが必要である。最後に、250,000語という比較的大きな

2 ここではYNQについてのみ言及する。

3 echo questionの例：Oui, je le sais. *Tu le sais toi?* Moi je m'en souviens pas.

4 1) ...y a une petite fille qui me dit « *...tu me mets de de la couleur sur les noels?* »

2) *...vous passez par ici?*

3) *i te donnent pas ton permis parce que t as pas donné d'argent à la boite. // t vois ce que je veux dire? / alors c'est pour ça //*

コーパスを用いたが、文末に現れる疑問マーカ―の *tu vois, n'est-ce pas* がほとんど検出されず分析不可能であったということがある。

2.2. フランス語 YNQ の韻律研究

2.2.1. Grundstrom (1973)

2.2.1.1. 疑問文とピッチ曲線の相関

Grundstrom はフランス語 YNQ における韻律特徴の中で、どのような特徴が YNQ を決定づける役割を担っているかを分析している。まず、自然会話コーパスから抽出された 148 文を疑問文 question、準疑問文 quasi-question⁵、非疑問文 non-question のカテゴリーに分けている。そして、それぞれの文の最終音節に見られるピッチ曲線のパターンとの関係性をスペクトログラフにしたがって分析し、疑問文に多く現れる最終音節のピッチ曲線を明らかにしている。

	疑問文	準疑問文	非疑問文	
上昇	38	11	17	66
上昇下降	4	1	14	19
下降 (高)	1	6	7	14
高平	5	0	1	6
下降 (低)	5	6	14	25
低平	2	5	11	18
	55	29	64	148

表 1：疑問文の特徴と最終音節のピッチ曲線との関係性⁶

以上の結果から、定量的には上昇調イントネーションと高平型イントネーションに疑問文特有のパターンが存在することが明らかになった。一方で、最終音節において同じくピッチの上昇を示す上昇下降調は疑問文と認めることは難しい。また、上昇調は疑問文の数が過半数 (57.5%) を超えていながらも、上昇調が YNQ 特有のイントネーションパターンと結論づけることはできない。

そこで Grundstrom は同じコーパスより 91 文を抽出し、15 人のインフォーマントに知覚実験を行った。知覚実験では文末イントネーションが上昇調の文と同時に非上昇調イントネーションを選択している。インフォーマントにはそれぞれの文を 1 回ずつ聞かせ、疑問文であると聞こえたら +1、非疑問文であれば -1 と評価させた。つまり、実験文の指標は -15 から +15

5 1) 話し手が聞き手に確認のみをしている、2) 話し手が仮定表現をしている、3) 話し手が聞き手の文を完了させるために提示している、4) 話し手が疑問文を途中まで述べている。

6 Grundstrom (1973), p.30.

にわたる。+8より大きい文は疑問文、+7から-7は曖昧文 *énoncé ambigu*、-8以下は非疑問文として定義されている。

	疑問文	曖昧文	非疑問文	
上昇	16	10	8	34
上昇下降	0	10	9	19
下降(高)	5	4	1	10
高平	5	2	1	8
下降(低)	1	2	19	12
低平	0	2	6	8
	27	30	34	91

表2：知覚実験における疑問文の特徴と最終音節のピッチ曲線との関係性⁷

先の実験と比べても、知覚実験において特徴的な結果は得られなかった。上昇調では疑問文と分類されたのは47.1%と半数以下であり、唯一過半数を超えたのは高平(62.5%)のみであった。さらに高平のピッチ曲線は全体で8回しか出現していなく、十分な数のデータとは言えない。ただし、Mario Rossi (1971) によると、聞き手はしばしば高平と上昇調の違いを混同する可能性があるとも分かっている⁸。いずれにせよ、上昇調イントネーションが必ず疑問文を示すマーカとなる訳ではない。そこでGrundstromは副次的な韻律特徴である「強さ」と「長さ」を調べている。

2.2.1.2. 上昇調の文における強さと長さ

最終音節が上昇調イントネーションの文の長さについて、興味深い結果が示されている。まず強さについて、上昇調のイントネーションの中で非疑問文は徐々に上がってから下がる傾向にあることが分かった。それに対し、疑問文では急な上昇 *crête* が観察された。上昇調でかつ強さの急な上昇があるものは16文中9文に現れた。しかしGrundstromはこの特徴が偶然ではないとしながらも、疑問文としてのステータスを付与することは難しいとしている。

そして、長さについても母音・子音環境のような複数の要因が音節の長さを変えてしまうため解釈が難しいとしている。それでもGrundstromは以下のように長さと疑問文の関係を導き出した。

⁷ Grundstrom (1973), p.39.

⁸ Grundstrom (1973), p.40.

	平均値	中央値	範囲
疑問文	12 cs	10 cs	6-24 cs
曖昧文	12.5 cs	13 sc	4-18 cs
非疑問文	18.5 cs	20 sc	8-30 sc

表3：知覚実験における上昇調の文の特徴と最終音節の母音の長さとの関係性
(単位センチセカンド)⁹

表3からも明らかなように、疑問文と知覚された文は疑問文で非疑問文よりも母音が短く発音されている。この結果より、Grundstromは最終音節の長さが疑問文を知覚するうえで重要な要因としながらも、音節の短さが疑問文の特徴であると立証することは程遠いとする。したがって、本研究では文末における音節の強さと長さについては考慮に入れないこととする。

2.2.1.3. 文末における付加疑問文の意味

Grundstromのコーパスにはn'est-ce pas以外の付加疑問文が使われることが分かっている。ここでの付加疑問文とは、疑問文の文末に付与される疑問マーカ― marque de l'interrogation である。これらは主語・動詞がある完全文でも名詞句のような不完全文でも用いられているが、nonとouが合わせて10回現れた。nonはn'est-ce pasと同じように話し手が相手の同意を期待している時に用いられる。一方でouは話し手が相手に他の選択肢の可能性を与えつつ、それは明示されない場合であるとされている¹⁰。

しかし、コーパス内に出現したこれらの付加疑問文に特有のピッチ曲線があるかどうかはここでは言及されていない。本研究ではこれらを疑問文に付随する重要な要素として捉え、そのイントネーションを観察していく。

2.2.2. Fontaney (1991)

2.2.1.1 コーパスと分析方法

Fontaneyはフランス語疑問文におけるイントネーションを、自然会話コーパスを用いて記述・分析した。コーパスの内2つは大学生同士の議論で、男女の対話と男2人女1人の3人での会話がある。また地下鉄のチケット売り場とタバコ屋でのやり取りが含まれる2つのコーパスも使用され、合計4種類と多様な場面で発話された疑問文が抽出されている。

これらの会話は音声分析ソフトではなく、聴覚印象に頼った印象主義impressionnisteの方法で分析が行われている。各音節に1から4の水準が付与されるのと同時に、標準よりも高い上昇・下降においては↑と↓によってレジスター registreの変化にも言及している。

9 Grundstrom (1973) , p.42.

10 Grundstrom (1973) , p.25.

2.2.1.2. 疑問文の分類方法

FontaneyはYNQの分類に、知の状態 *l'état du savoir* による会話参加者同士の関係性を用いている。この分類は、話し手が聞き手の話す内容に対してどのような意図で疑問を発するかという観点に立っている。まず *de re* と *de dicto* であるが、*de re* は「相手の言ったこととは関係のない、話し手の知識の要求」を示している。一方で、*de dicto* は「相手が言ったことに対する反応を示した際に発せられる疑問文」である。このカテゴリーには以下の4つの下位分類がある。(a) 話し手が聞き手の言ったことがよく聞こえなかった場合、(b) 聞き手が言ったことが完全に正しくない場合、(c) 聞き手が文を言い終えることが出来ず、話し手が語(句)を提案する場合、(d) 話し手が相手の言ったことが理解できたものの、内容に関して疑問・驚きがある場合。次に、「話し手が聞き手の思っていることを尋ねる」*de sententia*。最後に *metadiscursive* は、「話し手が自分の言ったことに対して、聞き手が理解したかどうか尋ねる場合」に用いられる。

2.2.1.3. 下降調イントネーションのYNQ

Fontaneyは下降調イントネーションを持つ文で、かつ主語と動詞の倒置が起きないYNQを見つけた。これはつまり統語的にも韻律的にも疑問マーカーが全くない疑問文と捉えることができる。Grundstrom (1973) の知覚実験では、下降調のイントネーションで疑問文と聞かれたものはごく少数であった(27文中6文)。一方でFontaneyは26例を挙げているが、その例を以下に示したい。

1 1 2 1 1 1 1 1 1 1 3 1

(1) Vous préférez avoir les gens directement (直接人に会う方がいいですか)

1 1 3 1 1 1 3 1 1 1 2 1

(2) ouais d'toute manière tu ... t'as rien contre les homosexuels (うん、いずれにせよ、君・・・君は同性愛者に対して全く反対ではないですよね)¹¹

上の例では低いレベルから、最終音節の前でわずかにピッチが上下している。文脈から判断すると、このイントネーションは *de sententia* の疑問文で、肯定文と同じイントネーションでもある。

1 1 1 4 1 1

(3) c'est plus c'qui t'plaît quand même (それにはやっぱりもう興味ないのだね)¹²

11 Fontaney (1991), p.121. 訳、番号は筆者

12 Fontaney (1991), p.123.

(3) の例は文の始まりが低く、(1) や (2) の例よりも文末で高いところから下降している。この例は相手の発話中に、その内容を補足するために挿入された文で、de dicto (c) に分類される。

2 2 3 2

(4) A. c'est l'Alsace (それはアルザスだよ) C. ça va oui (大丈夫)

2 2 2 3 2

(5) A. ↑ c'est pas la peine (その必要はないかな) C. ça va comme ça (このままで大丈夫)¹³

(4) と (5) は店員 (A) に対して客 (C) がハンコを押してもらうように依頼する場面で、店員は相手の答えを自分が知っているながらも客に足して質問をしている。そのため、一般的な疑問文のように全体的なレジスターが高いが、下降が高い3や4から始まっている。これはde dicto (b) に当てはまる。

以上3つの下降調イントネーションを持ったYNQの例を概観したが、これらには共通点があると言われている。それは、YNQの答えを知っているのは相手 (話し手に対する聞き手) であるが、それと同時に話し手も何らかの理由でその答えを知っていたり理解していたりする場合である¹⁴。これはGrundstromの実験で準疑問文quasi-questionと分類された文と一致している。

2.2.1.4. 疑問マーカの hein

Fontaneyのコーパスで現れたest-ce que以外の疑問マーカはheinとnonのみであった。ここでheinは2つの出現パターンがあると考えている。1つは、分離disjointで、これ自体が疑問文となっている。相手の言っていることが聞こえなかったり、理解できない場合、「もう一度言って欲しい」という意味で用いられる。2つ目は付随conjointで、文末に付与され話し手自身の発話に向けられたものである。この疑問マーカは直前に来る文が肯定文であり決して疑問文ではないとしている。その判断基準として、heinの直前の文のイントネーション特徴がある。つまり、est-ce que同様に、疑問マーカが存在することで実際にFontaneyは3つのイントネーションがあると分類しているが、そのすべては非上昇調である。

2 4 1 2 3

(6) C. pour Sceaux hein (ソー行きですよ)

13 Fontaney (1991), p.124.

14 Fontaney (1991), p.130.

1 1 2 2 2 1 2 ♣ 1 1 ♣ 2

(7) A. il faut prendre le R E R hein (RERを使わないといけないですね)

1 1 1 1 2 ♣ 3 3 ♣ 1 2 ♣ 3

(8) j'suis arrivé avant vous hein (私はあなたより先に着きましたよね)

1 1 3 ♣ : 1 1 ♣ 2

(9) j'en ai marre hein (私は嫌になりましたよ)¹⁵

上の例ではheinの直前の音節でイントネーションがすべて最低の1まで下降している。(6)はSceauxにアクセントがあり、heinが「私が言ったことがわかりましたか」という意味が含まれると説明されている。(7)では「RERを使わないといけない」という補足的情報を自分の行先を示した後に付け加えている。そのため、heinが「分かる」「tu sais?」という意味があるとしている。(8)に関しては、「私はあなたより先に着いた」という情報を相手に伝えたくて、「それについてあなたは何を言うか」を相手に尋ねている。そして、(9)での文は話し手が嫌気がさしたことについて主観的な意見を述べているが、heinが疑問マーカ―として「私を理解できるか」どうか尋ねているところに疑問文としての性質があるとできる。

4 2 2 4 ♣ : 2 2 ♣ 4

(10) ah faut dormir hein (ああ、寝なくてははいけないですね)

2 3 3 ♣ 2 2 ♣ 3

(11) C. euh non jamais hein (ええと、まったくないですね)¹⁶

(10)、(11)は肯定文の下降が最低の1まで下がらず途中で止まっている点で(6)～(9)と異なる。(10)はあくびをした話し手が「寝なくてははいけない」という意思を聞き手に伝えている肯定文である。しかし、heinが「あなたもそう思いませんか」と意見を求めているという意味があるため、疑問文に分類されている。(11)は店員が客に対して返金をしてもらうためにある駅を通る機会があったかを尋ね、客はその機会が「まったくない」と答えた。それと同時に、heinが「あなたわかりますか」と文脈の中に相手を巻き込んでいる働きを持つ。

1 2: 1 1 1 ↑ 4 1 ♣ 3

(12) et pas forcément mecs hein (そして、必ずしも男という訳ではないですね)

15 Fontaney (1991), p.140-141.

16 Fontaney (1991), p.141-142.

1 2 2 2 4 2 2 4

(13) ah j'la connais pas cette carte hein (ああ、私はこのカードは知りませんよ)¹⁷

(12) と (13) は hein 直前の肯定文のイントネーションが高く平板型である傾向がある例である。Fontaney は文の終わりが平板型になることで「言語化されていないコメント」が含意されているとしている。(12) の mecs は高い平板型で「私はそれが重要だと思っている」ことをそのイントネーションで表現している。

ここまでの例で、肯定文の文末に現れる hein にはイントネーションの共通点があることが分かった。1つは、hein 直前の音節が肯定文特有の下降調や平板型であったことである。そして、2つ目は hein それ自体のイントネーションが上昇調であったことである。そのことから、Fontaney のコーパスではタバコ屋とチケット売り場でこの疑問マーカが多く見られたことから、hein は相手とのインタラクションを助長させる「道具」であることが分かる。一方で、これら以外の会話においてはこの疑問マーカは見つからなかった。

2.2.3. Marandin et al. (2004)

前述の2つの先行研究でも説明していたように、フランス語における肯定文と疑問文の対立は下降調イントネーション vs. 上昇調イントネーションとすることができない。そこで Marandin et al. はフランス語に見られるイントネーションパターンを下降調、上昇調、上昇下降調に分類している。そして、全体の文に意味を与える最終音節のイントネーションを提示し、それぞれのイントネーションが持ち得る意味を紹介している。

しかし、「イントネーションの意味」を検討するうえで問題もあるとしている。例えば、英語のイントネーション研究では話し手の聞き手に向けられた態度と関連した interactive-attitudinal アプローチ (Bartels, 1999) を採用している。つまり、イントネーションによって発話された文が話し手の範囲内 commitment なのか、話し手と聞き手両方の範囲内なのかが決められる。ただし、この定義はフランス語には適していないとされている。

したがって、Marandin et al. は話し手と聞き手の関係性について語用論的枠組みを提案しようと試みた。会話の中でその参加者たちは完全に同じ文脈を共有しておらず、話し手は聞き手に対して情報の正誤や情報そのものを尋ねることがある。その時が疑問文が用いられる文脈であると考えられる。このような手法で Marandin et al. は一般的な下降調と上昇調の識別も、話し手と聞き手の関係性で説明できるとしている。

2.2.2.1. 下降調イントネーション

Marandin et al. は下降調イントネーションに関して Delattre (1966) で定義された4つのパ

¹⁷ Fontaney (1991), p.142.

ターンがあるとしている。¹⁸しかしこれらはF0曲線の形でそれぞれの意味を区別することができない。下降調のプロトタイプは下の図1が例として挙げられている。

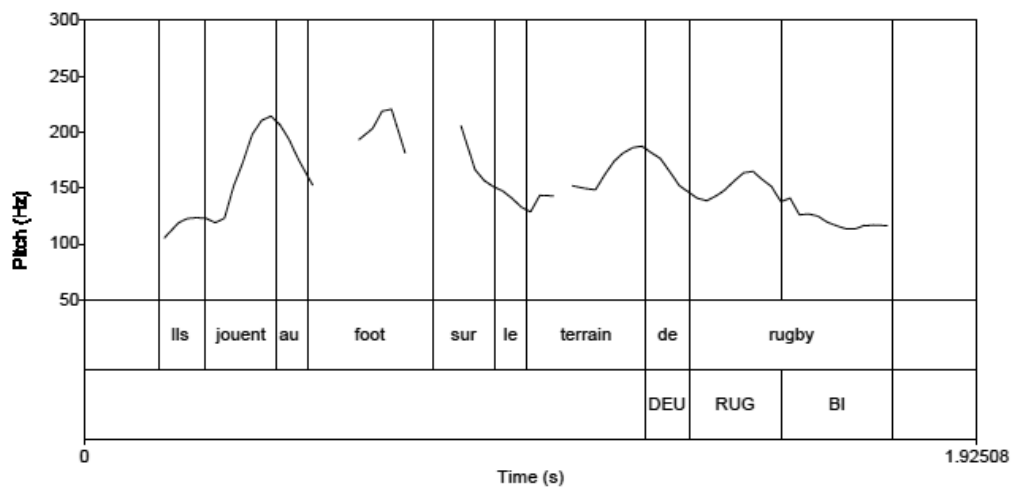


図1：肯定文の下降調イントネーション（彼らはラグビーのグラウンドでサッカーをする）¹⁹

図1から分かるように下降調イントネーションは文全体もしくは最後のリズムグループで下降を示す。一方でMarandin et al.でも下降調イントネーションがYNQの意味になることがある。

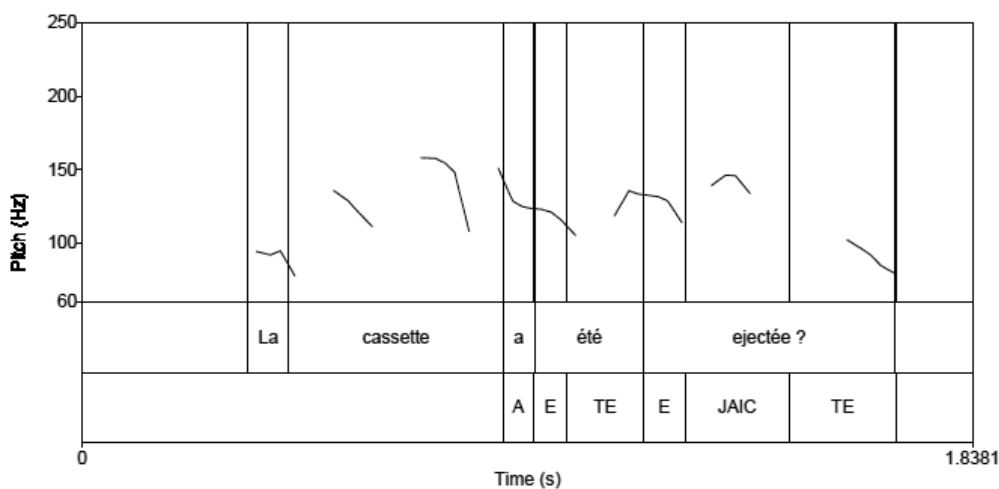


図2：疑問文の下降調イントネーション（カセットが出てきたのですか）²⁰

18 命令 commandement, 疑問 interrogation, 感嘆 exclamation, 文末 finalité。

19 Marandin et al. (2004), p.3.

20 Marandin et al. (2004), p.9.

図2は消費者とアフターサービスのオペレーターの会話で、消費者の「カセットが出てきた」という肯定文に対してオペレーターが全く同じ文で質問している場面である。これは Fontaney の de dicto (d) の分類に当てはまると考えられる。Fonagy (1973) はこのオペレーターのイントネーションの意味は、「私は聞き手が Yes と答えることは分かっているが完全に確認したい」としている。

2.2.2.2. 上昇調イントネーション

Delattre は非下降調イントネーションのパターンは1つだとしているが、先の Fontaney (1991) と Grundstrom (1973) では複数の上昇パターンがあることが発見されている。そこで Marandin et al. は上昇調を2つのパターンに識別している。

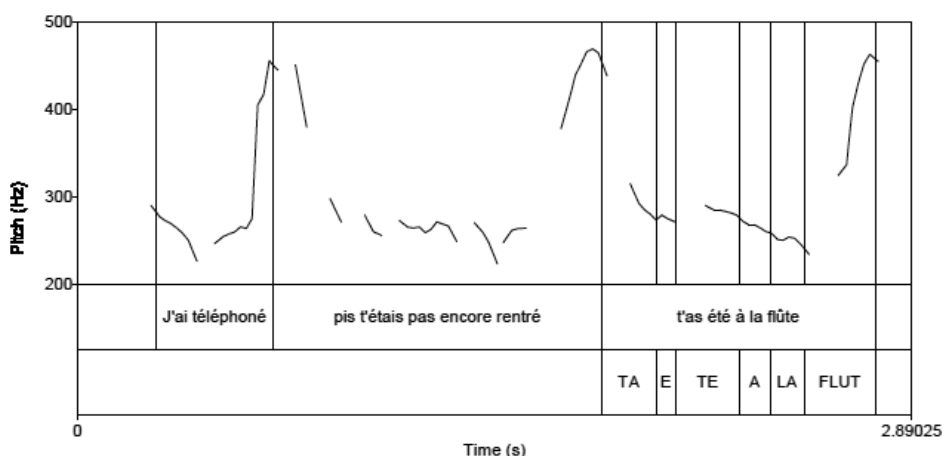


図3：疑問文の上昇調イントネーション（君はフルートのレッスンに行っていたの）²¹

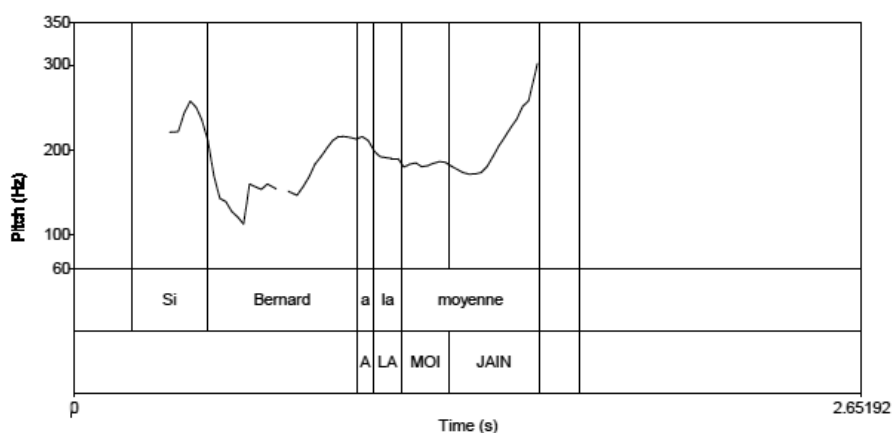


図4：肯定文の上昇調イントネーション（いいえ、ベルナルが平均点を取っているよ）²²

21 Marandin et al. (2004), p.4.

22 Marandin et al. (2004), p.8.

これまでの先行研究からYNQのプロトタイプは上昇調であるが、図4のような肯定文でも上昇調イントネーションが観察されている。この場合、Fontaneyは発話の内容（ベルナルが平均点を取る）に対して話し手が不完全に感じている。しかし、聞き手はそれを肯定文だと捉えるのは、話し手が内容に対して聞き手よりも自信があるからであるとされている。

2.2.2.3 上昇下降調イントネーション

上昇下降調に関しては、Delattreが含意のイントネーション *intonation d'implication* と呼ぶように単純な上昇調と区別する必要がある。また、Marandin et al.は上昇下降調を文末で観察する際に、1) 第2尾音節 *penultième* で上昇し最終音節で下降するものと、2) 最終音節で上昇下降するものの2パターンで考えるべきだとしている。しかし、例の図5では第3尾音節から上昇が始まっているようにも見える。

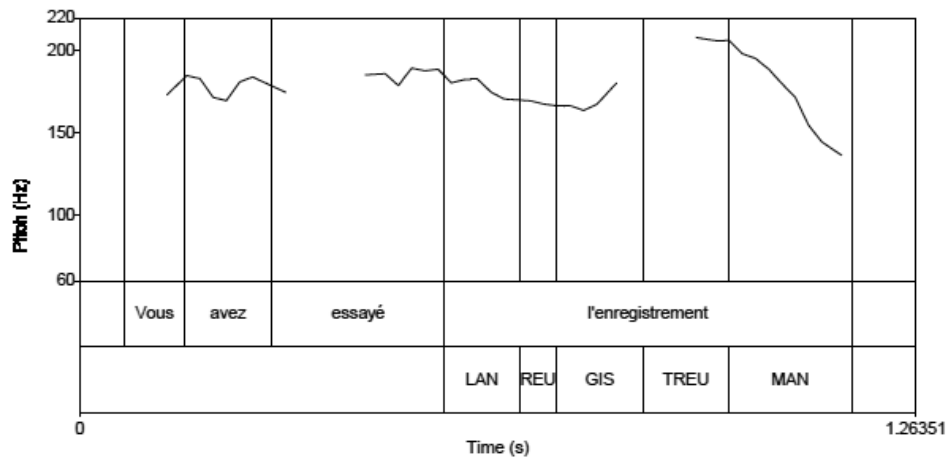


図5：疑問文の上昇下降調イントネーション（あなたは録音を試してみましたか）²³

図5の例はMartins-Baltar（1977）でも言及された *verifying question* に分類されるとしている。しかし、本研究では上昇下降のイントネーションは考慮していない。以上の各イントネーションパターンをMarandin et al.が語用論的アプローチによって図式化したものが図6である。

23 Marandin et al. (2004), p.5.

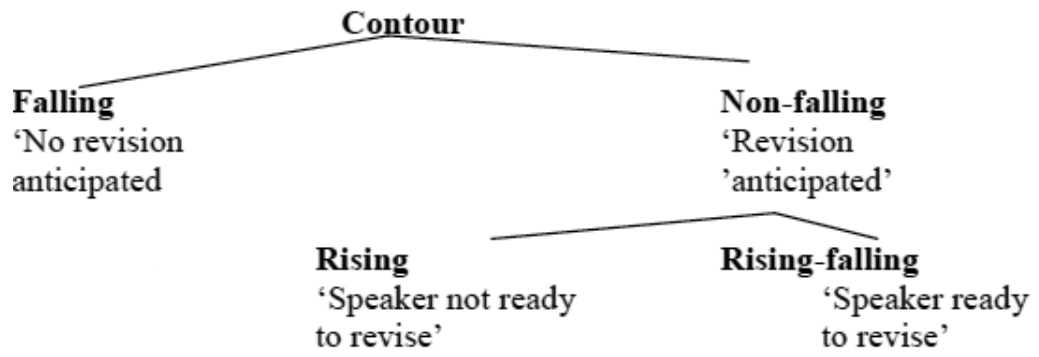


図6：ピッチ曲線と発話者の意図の関係性²⁴

24 Marandin et al. (2004) , p.12.

3. リサーチクエスチョン・イントネーションの記述

3.1. リサーチクエスチョン

前章の先行研究の概括ではフランス語YNQに関する音声学的研究に加えて、社会言語学的・語用論的手法に沿ったアプローチがなされてきたことを取り上げた。Coveneyは伝達機能Communicative Functionを用いてYNQを文脈ごとに細かい分類を行った。話し言葉ではSV型が過半数を超え、その中でも語用論的な意味が非常に多様に分類できることが確認された。しかし文末に付与される疑問マーカについてはほとんど言及されなかった。

韻律研究ではGrundstromが実験により上昇調イントネーションにと高平型イントネーションにYNQの特徴があることが分かったが、上昇調のみがYNQを決定づける性質とすることは困難である。Grundstromの知覚実験では下降調イントネーションでYNQと聞き取られた文が少なかった。一方で、Fontaneyは聴覚印象によってイントネーションを分析し、下降調イントネーションがYNQとして確立していると述べている。そのことからSV型の疑問文を「イントネーション型」とすることには誤りがあるとしている。一方で疑問マーカについてはGrundstromでは触れられず、Fontaneyはheinのみを扱っているため、疑問マーカ特有のイントネーションについては未だ定量的な研究がなされていないと言える。また、Marandin et al.は文全体にわたるイントネーションの形と意味をリンクさせ、独自の語用論的枠組みを導き出した。しかしながら、近年では疑問文について十分なコーパスを用いた体系的な研究はあまりなされてこなかった。その中で本研究はフランスで録音されたコーパスに基づいた音声資料を利用したフランス語YNQの音声特徴を記述していくことを目標とする。

したがって、本研究では改めて以下のリサーチクエスチョンについて考察を深めつつ、フランス語YNQのイントネーションのパターンを明らかにしていく。まずは、フランス語YNQは上昇調と非上昇調のトーンがどのような頻度かつ文脈で現れるのか。そして、Fontaneyで観察されたheinを含む疑問マーカの種類を分類し、そのイントネーションパターンによってカテゴリ分けを試みる。これらを通してフランス話し言葉に現れるYNQのイントネーションパターンを記述していくことを研究目標とする。

3.2. イントネーションの記述：Mertens (2004, 2006)

上記のリサーチクエスチョンに答えるために、本研究ではMertensのイントネーション記述方法を用いる。2.2.で紹介した先行研究では、意味論的かつ語用論的手法でイントネーションの意味を解釈していくことが目的であったのに対し、Mertensはより客観的な手法を用いている。まず、イントネーションを統語的観点によりイントネーショングループ (GI) の枠組みを作り、それぞれのGIにトーンを付与する。Mertensは、ピッチ曲線の記述に関してDooren & Eynde (1982) を参考にしている。

→ $GI = ((unstr) (AI)) (unstr) AF (appendix)$

unstr		AI	unstr		AF	appendix
l	l	H	l	l	L-L-	l...l
h	h	L	h	h	H+H+	
					HL-	
					H/H	h...h
					/HH	
					\HH	
					HL	
					LH	
					HH	
					/LL	
					LL	
					\LL	

(comme dans les pages jaunes) (de l'annuaire) (en France) (catégories) (professionnelles)

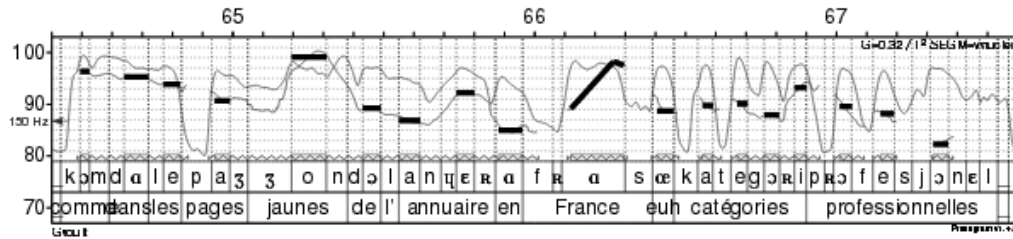


図7：Prosogramによるトーン（太線）の付与²⁵

本研究では図7が示すようなProsogramによるピッチ曲線の可視化を用いた。ProsogramはPraatを利用したトーン知覚モデルのスクリプトである。本研究ではglissandoの領域は $G=0.16/T^2$ とし、より人間の知覚に近い形式を選択した。glissandoは耳で知覚できるほどの声の高低を表す²⁶。このように文末最終アクセントにおけるトーンパターンを本研究では以下のように定義づけた。²⁷

- ① LL トーン
- ② HL トーン
- ③ HH トーン
- ④ LH トーン

25 Mertens (2006) , p.7-10.

26 詳細は Mertens (2004) とサイト (<http://arts.kuleuven.be/pmertens/prosogram/>) を参照。

27 本稿における文末最終アクセントとは、最終音節のことである。

4. 実験

4.1. 実験の目的

本章ではフランス語 YNQ をコーパスから抽出し、そのイントネーションの特徴を記述する。実験の目的は、記述したイントネーションによって上昇、非上昇調のような分類を定量的に行うことである。また、本コーパス内の YNQ では、Fontaney (1991) で観察された hein のような疑問マーカーは観察されるのかも見ていく。記述方法は Mertens (2006) の枠組みを参考に、筆者が YNQ の最終音節を分析するために最適だと考える方法を用いる。

4.2. コーパス

本研究では 21 世紀 COE 「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」による東京外国語大学フランス語話し言葉コーパス (エクサンプロヴァンス、2010 年)²⁸ を用いた。インフォーマントはフランス語母語話者 71 名で、年齢は 18 歳から 64 歳までであった (平均 27.3 歳)。録音は大学内の研究室や図書館にて行われている。1 会話約 60 分で、全 34 会話が収録されている。単語数は延べ 484,232 語である。

本実験では 2 人での 27 対話を選択しそれぞれ冒頭の 20 分を分析対象とし、YNQ を抽出した。その際、フランス語母語話者の転写担当者によって疑問符 (?) を付与された発話文のうち相手が正誤の判断を含む oui、non、je ne sais pas やこれらに準ずる返答をしている文を分析対象とした。実際に分析されたコーパスの単語数は延べ 130,629 語である。

4.3. 分析方法

これらの音声資料に対して、Mertens (2006) のイントネーション記述の方法を用いてトーンの付与を知覚的判別により行った。また、知覚的判別が音響的な問題により困難な場合には、2.3.2. で前述した Prosogram を用いた。音節の区切りと音素の付与は手動で行った。これによってピッチ曲線 (基本周波数) を確認しながら視覚的にイントネーションを判断した。この作業はコーパスの音声を読み、紙面上で各文の下にそれぞれのトーン記号を記入する方法によって行われた。以下が実際の分析された文の例である。

(Et toi) (t'as jamais le droit) (d'inviter des gens) (entrer dans ta chambre) ?

l HH l.....l LL l.....l LL l l LL

そして、Prosogram による視覚的な分析が以下の通りである。

28 調査は Aix-Marseille 大学文学部の協力のもと、グローバル COE 調査チームによって 2010 年 2 月 20 日～3 月 4 日に実施された。

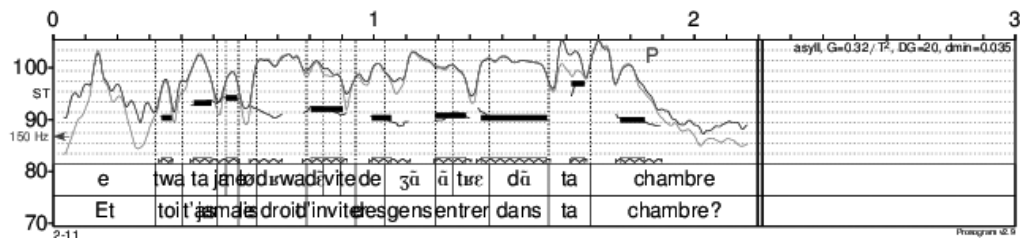


図8：Prosogramによる視覚的分析

また、文末にappendixが現れる場合は、以下のようなカテゴリーを用いた。

- ①AF (l ...l)
- ②AF (h ...h)
- ③AF (l ...h)
- ④AF (h ...l)

③と④はMertensのカテゴリーに存在していなかったが、今回筆者によって付け加えられた文末appendixのイントネーションである。

4.4. 結果

4.4.1. 統語カテゴリー

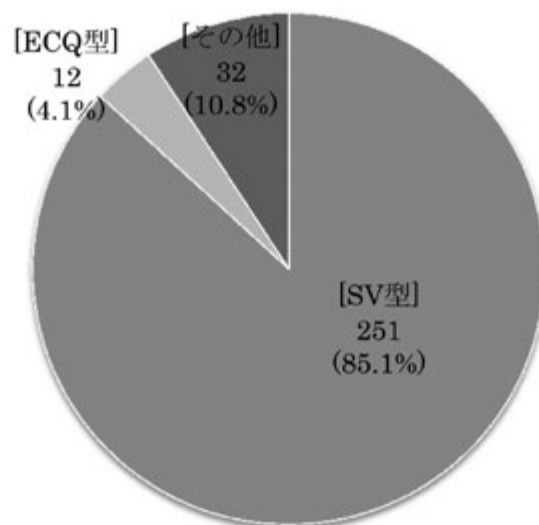


図9：YNQの統語的カテゴリー (N=295)

本コーパスにおいてYNQの統語的カテゴリーは図9が示すようになった。「SV型」は文の主語と動詞が倒置していないものである。「ECQ型」は文頭に形態マーカ―のest-ce queがあり、かつ主語と動詞が倒置していないものである。また、「その他」とは主語と動詞の存在しない名詞文などが含まれる。全体を通して、SV型が8割以上を占めていて、ECQ型は約1割のみに留まった。今回は主語と動詞が倒置しているVS型の例は得られなかった。これはコーパスが主に知り合い同士による日常会話であったことに起因する。²⁹本研究では、SV型のみを対象とする。

4.4.2. 最終アクセント

最終アクセントの現れ方は以下のものであった。

トーン	非上昇調		上昇調	
	LL	HL	HH	LH
頻度	72	6	130	43

表4：YNQ文末イントネーションの最終アクセント (N=251)

最終アクセントでは上昇調と非上昇調に大きく分類できる。LLは下降はしていないが上昇して、HLは明らかに下降をしているので、2つのトーンを非上昇調とまとめることとする。HHとLHは知覚的に上昇が聞き取れるために上昇調とまとめることとする。全YNQにおいて、上昇調と非上昇調の割合はおおよそ2対1となった。

4.4.3. 疑問マーカ―

本コーパスに出現した疑問マーカ―の出現形と頻度をまとめた。

出現形	頻度	出現形	頻度
non	23	sinon	2
hein	14	en fait	1
ou pas	10	tu vois	1
ou	9	ça	1
toi	4	quoi	1
donc	2	je crois	1
n'est- ce pas	2	合計	70

表5：文末疑問マーカ―の種類と頻度 (太字が分析対象)

29 話し言葉では否定辞の ne や Ouais などくだけた表現が多く見られる。

疑問マーカ―と筆者が考えたものは13種類現れた。合計では70回出現している。この13の文末に現れた要素をどのように捉えるかを考えたい。ただし、この中ですべてが疑問マーカ―と捉えるのは正しいとは言えない。先行研究では、“hein”のみが扱われていた。本研究では、出現頻度の比較的高い“non”、“ou pas”、“ou”、また2例しかないものの付加疑問の基本形である“n'est-ce pas”についてその現れ方を観察していく。

4.5. 分析

4.5.1. 最終アクセント

ここでは、それぞれの最終アクセントのトーンの種類による分類を、YNQの現れる文脈とともに観察していく。分析対象のYNQは斜体・太字で記している。

4.5.1.1. 非上昇調：LL

LLトーンは文末最終アクセントが上昇ではないが、下降が知覚できないトーン特徴を示すこととしている。(1)はMWがまずCDに対して「最近忙しい」という情報を述べるが、CDはMWに「来る前にFull Metal (アニメの名前)を観ていたか」と尋ねた。CDのMouais³⁰という返答から、MWの「忙しい」という内容をCDは信じていないことが伺える。

つまり、(1)でのLLの現れについて、単なるYNQの疑問文ではないという先行研究と同じことが言える。話し手はその答えを知っていながら、相手に確認の意味で内容(来る前にアニメを見ていたこと)に関する質問をしている。一方で、聞き手はその質問に対し「はい、午後の間ずっと」と返答しているため、話し手の発言がYNQと認識していると考えられる。

(1) **MW35** – Oui, c'est tendu en ce moment. [bruits]

CD36 – Mouais. ***Tu regardais Full Metal avant de venir ?***

(l.....l LL) (l.....l LL)

MW36 – Oui toute l'après-midi, devant les mangas ! Tout le temps.

CD37 – Et tu trouves que c'est une attitude d'étudiante sérieuse, ça ?

MW37 – Non, non non, [...]

下の例(2)は、文末に疑問マーカ―が添加されている。(1)と同じく2つのGIを形成していて、疑問マーカ―直前の最終アクセントはLLトーンが観察されている。GPは「ルクセンブルクでの給料がフランスよりも高額であること」について話していて、AFは「そういう理由
30 しばしば話し言葉で、“Oui, mais je n'en suis pas vraiment sûr”の意味で使用されることがある。

でルクセンブルクに滞在している」のかを質問している。(1)とは異なり、話し手は聞き手の言ったことを信用しているが、AFはGPが「ルクセンブルクに住んでいるのが給料のため」ということは確認のYNQの意味でLLトーンが用いられていると考えられる。

(2) GP17 – Oui, en plus les salaires sont plus élevés [rires] qu'en France.

AF18 – C'est génial !

GP18 – Oui.

AF19 – *C'est pour ça que tu restes là-bas, en fait ?*

(l.....l LL) (l.....l LL) (l..... l)

GP19 – Oui, ben oui.

LLトーンの例は全体251例中72例と比較的高い頻度で表れた。これにより、非上昇調のイントネーションで最終アクセントにHのトーンが現れない文でもYNQの疑問文として知覚されることが分かった。

4.5.1.2. 非上昇調：HL

本研究では非上昇調の中で最終アクセントがHLトーンの文は6例のみしか観察されなかった。以下の2例は最終アクセントでトーンが高く上昇し、最後に下降するが前の音節よりも低くはならないイントネーション特徴を持つ。³¹(3)は2つのGIを形成している。文脈は、今年中にアパートを引っ越すBに対して「9月より前ではないのだよね」とAが質問をしている場面である。Bの返答は「うん、でもアパートを解約するには3か月前の告知が必要」と言っている。つまり、Aは少なくともBがアパートを解約するのは9月以後であると知っていた。なので、この場合も確認のYNQとすることができる。

(3) A61 – Mais essaye de voir si (il n'y) y a pas déjà quelqu'un qui cherche ee une nouvelle coloc.

B61 – Oui voilà. ça peut se faire comme ça aussi.

A62 – *De toute façon c'est pas avant septembre ?*

(l.....l HH) (l.....l HL)

B62 – ouiii, mais comme i (l) faut donner un préavis de trois mois pour pouvoir quitter l'appartement.

A63 – Ben, on est en mars, avril, mai.

(4)は文末に疑問マーカ―が付与されているHLトーンの例である。文脈はパーティーの時

31 Prosogram による音響分析の結果は巻末の付録を参照。

に作るお菓子の話で、何を作るのがいいかを話し合っている場面である。TJは「アラブ系料理と水ぎせるがいい」と言い、BBはそれに賛同する。そこで、TJは改めてBBと企画するパーティーを「もうじきやりましょうね」と強調している。

ここでは疑問マーカ－のheinがあるが、もしこれがなかったとしたら、YNQではなく肯定文もしくは命令文として母語話者の転写担当者は知覚していた可能性がある。このように明確に下降が知覚できる文もYNQのカテゴリーとして分類可能だと分かった。

(4) **BB80** – Et un bon gâteau au chocolat !

TJ81 – Ah non, moi, je serais plus pour les les spécialités arabes et un narguilé.

BB81 – C'est vrai, un bon petit makrout ee

TJ82 – Un bon makrout un makrout ! [bruit] *Oh, on se fait ça bientôt hein ?*

(11) (1...1 LL) (1 HL) (1 1)

BB82 – Ah oui.

HLトーンはフランス語YNQの典型的なプロトタイプではないことは確かではあるが、このように非上昇調の中でも下降が知覚できる疑問文あることは先行研究でも言われていた。

4.5.1.3. 上昇調：HH

上記の非上昇調に対して、上昇調イントネーションのフランス語YNQは高い割合で観察された。約5割の確率で文末イントネーションの最終アクセントがHHトーンであるという結果が本研究では得られた。(5)ではMWとCDがそれぞれの家族について話している。YMQの文脈はMWが「故郷のロデに帰った際に祖母に会った」ことについて、CDが「彼女の体調は良くなったか」と尋ねている。YNQは3つのGIで構成され、各アクセントはLL、LL、HHと最終アクセントのみ上昇調が観察された。

(5) **MW2** – Pendant 2 semaines et j'en ai profité pour rentrer dans ma ville natale, à Rodez.

CD3 – Ah ouais.

MW3 – Et c'était bien, j'ai vu mon oncle qui était descendu de Londres exprès, et j'ai vu ma grand-mère.

CD4 – *Ah oui, c'est vrai, elle va mieux ?*

(1 LL) (1 LL) (1.....1 HH)

MW4 – mmm ça dépend des moments, elle est toujours un peu bizarre mais ça va à peu près.

(6) は NV と CA が今年の旅行先である日本についての会話である。そこで飛行機代が非常に高額であることが話題に挙がり、フランスから日本までの距離について CA が「(日本が) 反対・・・地球の反対側にあるからだよね」と述べている。GI は 3 つにわたり、疑問マーカとして hein が用いられている。疑問マーカ hein については 4.5.2. で詳しく見ていくが、下の例は肯定文とも取れる文脈で用いられている。最終アクセントが HH でかつ母語話者の転写にも疑問符が付与されているため、ここでは YNQ と分類としている。一方で、この YNQ は肯定文ととらえる可能性もあることは否定できない。もう一つの解釈は、CA が「(日本が) 地球の反対側にある。そうだよな」という意味が考えられる。hein が独立した文もしくは句を形成し、前の肯定文に関して聞き手の同意を求めているという解釈である。

(6) NV93 - A mon avis, hein.

CA94 - Hum ! Ouais, ouais, c'est ee. (Et) b (i) en, *c'est à l'autre bout l'autre bout du*
(l.....] LL) (l.....).

monde, hein ?

.l HH) (h h)

NV94 - Ouais.

CA95 - C'est à l'opposé de nous.

HH トーンを概観するうえで注意したいことは、ほとんどの場合が (5) の例のように純粋な質問に対する真偽を問う疑問文であったということだ。ただし、疑問マーカ hein などが文末に出現する場合に限り、(6) のような疑問文としてのステータスが低い文が観察された。これについてはまた 4.5.2. で詳しく検討したい。

4.5.1.4. 上昇調：LH

上昇調の中で特徴が異なるもう一つのトーンは LH である。このトーンは最終アクセントのピッチ曲線が上昇していて、Prosogram 上の glissando によってもその上昇がはっきりと示されている。(7) は NV と CA の会話であるが、インフォーマントの 2 人がイベントへ行った時のがテーマとなっている。そのイベントは合計 3 日間開催されていたようで、CA は NV に対して「君は 3 日間ともそこへ行ったの」という質問をしている。GI は 2 つにわたり、文頭から 2 つ目の GI における “trois” まで平板型で続いているが、そこで、最終アクセントの “jour” で glissando が顕著に現れている。その上、文脈からも CA は NV が「3 日間イベントに行った」かどうかは知らなかったことが伺える。したがって、CA の LH トーンの疑問文は上昇調イントネーションを用いた純粋な YNQ であると考えられることができる。

(7) NV1 – J'ai été à la Japan Expo. [bruits]

CA2 – Oui, Oui, j'y ai été.

NV2 – J'ai essayé de t'appeler, mais tu (n') as pas répondu.

CA3 – *Tu y étais pendant les 3 jours ?*

(l.....l LL) (l.....l LH)

NV3 – Oui j'y étais pendant les 3 jours.

(8) では対話者2人が共に出席している大学の経済学講義について話されている。まずCDが「マクロ経済学」の話題を出すと、MWが「ああ、ところでマクロ経済学で君はちゃんとノートを取った」と質問をしている。このYNQは最終アクセントをもつ2つのGIと疑問マーカ ou pas を末尾に持つGIの3GIで構成されている。このYNQはMWがCDに対して「ノートをきちんと取った」かどうかを純粹に質問しているため、非上昇調で見られたようなバイアスのかかったYNQではないと分類することができる。

(8) で観察された疑問マーカ ou pas は本コーパスで10回出現している。これは non、hein に次いで使用されている疑問マーカである。「~かどうか」という選択疑問文の特徴も見て取れる。疑問マーカについては4.5.2.でそれぞれ検討する。

(8) CD38 – **, il (n') arrête pas « Il faut qu'on travaille, il faut qu'on travaille ».

C'est le premier à le dire « Nan mais attends après trois heures de macroéco
(nomie) je (ne) travaille pas moi » [rires]

MW38 – *Ah au fait, la macroéco (nomie), t (u) as bien pris des notes, ou pas ?*

(l.....l LL) (l.....l HL) (l.....l LH) (l l)

CD39 – Non mais **, il prend bien les notes.

MW41 – Cool !

4.5.1.2.と4.5.1.3で見たように、フランス語YNQのイントネーションは最終アクセントにHHトーンとLHトーンを持つ2つの上昇調が典型的なパターンとして位置付けることができる。一方で、Marandin et al. (2004) で見たような上昇下降調イントネーションは観察することはなかった。その理由として、本研究では最終アクセントのみを分析対象としたことが考えられる。

4.5.2. 疑問マーカ

本研究で分析していく疑問マーカはnon、hein、ou pas、ou、n'est-ce pasの5つである。Mertensはこのマーカをappendixと称し、文末のGIに付与されたアクセントを持たない1

32 ** は人名のため省略する。

つもしくは複数の音節である。本研究ではこれらを便宜上、文末「疑問マーカ―」と呼ぶこととする。

	non	hein	ou pas	ou	n'est-ce pas
l l	0	2	2	3	0
h h	6	12	0	0	0
l h	16	0	0	0	2
h l	1	0	8	6	0

表 6：疑問マーカ―のトーンの種類と頻度 (N=58)

表6から、フランス語YNQの文末に観察される疑問マーカ―のトーンは、その種類によってある一定の形式があることが分かった。ここからは頻度が高かった4つの疑問マーカ―と n'est-ce pas の5つをそれぞれの文脈を考慮しつつ分析していく。

4.5.2.1. non

コーパスで最も高頻度で出現した疑問マーカ―はnonであった(23回)。まず、その中で現れた典型的な例を挙げる。

(9) LB124 – Ils eee, ils ne sont pas d'accord entre eux, les profs.

MR126 – Mais ça fait plusieurs années qu'i (ls) le font quand même!

Il devrait le savoir, non ?

(l.....l HH) (l h)

LB125 – Mais je ne sais pas ! Enfin, j (e ne) sais pas du tout eee. Après, (en) fiini, i

(l)s préfèrent faire partir des LLCE {plutôt} que des LEA.

LBは自身の留学について、決定権を持っている先生からその答えを聞くことができないと話している。それに対しMRが「彼はそれについて知っているはずじゃないかな」と質問を投げかけている。この場合、話し手の「彼がそれについて知っている」ことへの確信度が高いことが考えられる。また、話し手は助動詞のdevoirの条件法を用いている。これは話し手が自身の言っている内容にある程度の確信がある場合に用いられる。

次に、nonのトーンパターンについては計23例中16例が(l h)で現れている(70%)。つまり、1つ目のGIである“il devrait le savoir”がYNQとしての文を構成していると同時に、疑問マーカ―のnonのみでも独立した疑問文の韻律句が成立していることが考えられる。

23例のYNQを概観すると、疑問マーカ―のnonを用いた話し手は聞き手に対して自身の意見を強調しつつ、相手にも正誤の余地を残す疑問の仕方をしているように見える。例(10)と(11)は最終アクセントが下降調LLトーンを伴う(l h)のYNQである。最終アクセント

がLLでかつ疑問マーカが (l h) のYNQはこれら2つのみであるが、両方とも共通した特徴を持っている。

(10) **FB131** – Oui ! I (ls) sont indépendants, mais c'est une ancienne colonie!

EL132 – Oui, j (e) crois, je crois.

FB132 – I(1) m (e) semble.

EL133 – *J (e) crois qu'elle f(ai) sait partie des DOM-TOM, j (e) crois. Non ?*

(l.....l HH) (l.....l LL) (l l) (l h)

FB133 – Nan. I (ls) sont indépendants quand même.

(11) **FB127** – Ben, Haïti, c'est quand même proche de la France.

EL128 – franch (e) ment. Ouais.

FB128 – *Il me semble. Non ?*

(l.....l LL) (l h)

EL129 – Oui, oui ! C'est,

文脈は(10)でハイチがフランスの海外領であるかどうかについての議論をしていて、(11)ではハイチがフランスに距離が近いという話をしている。以上の2例は同じインフォーマントの対話内で観察された。また、それぞれの動詞に注目すると、思考動詞のcroireとsemblerが用いられている。croireは一般的にpenserやtrouverと並んで話し手の主観的な意見や思いを述べる際に使用される。(11)では、“il me semble que (Haïti est proche de la France)”とque以下の節が省略されていると判断できる。

したがって、これらの文は疑問マーカの疑問イントネーションによりYNQであるという性質を持ちながら、別の解釈が可能である。つまり、疑問マーカの直前までが肯定文の様相を保持し、nonが独立した韻律句を形成しているということである。これは(9)でも同様のことが言えるが、最終アクセントがLLトーンであることが相違点である。

4.5.2.2. hein

nonが上昇調のトーンを持ち、独立した韻律句を形成し得ることが分かったが、同じ単音節のheinは非常に異なった結果となった。パターンは (l l) と (h h) の2通りで、Mertensの定義したappendixの韻律特徴と一致した。

(12)は日本のアニメとドラマについての対話である。CBは「アメリカのドラマみたいなものだよね」というYNQを発して、聞き手のCVは「うん、でもちょっと違う」と答えている。(13)は対話者がお互いが受けている大学の講義の内容について話している。LSは「ここまで見てきた内容に関しては面白い」と述べた後に、「これからよく考えていこうね」と

YNQを投げかけている。聞き手のABの答えは「うん」と肯定であった。

(12) CV233 – Mais les drama, eeeee ! Quand tu r (e) gardes un épisode en entier, eeee.

CB233 – [rire] *C'est comme quand on r (e) garde les séries américaines, hein?*

(l.....l LL) (l.....l LL) (h h)

CV234 – Ouais, mais, c'est, c'est différent!

(13) LS219 – Et, eeeee. On aime d (é) jà, ben, tous les aspects qu'on a vu, ee. Pour, pour l'instant ça, ça nous plaît, donc, ee.

AB220 – mm.

LS220 – *On verra bien par la suite, hein?*

(l.....l HH) (h h)

AB221 – Ouaiis. mm. Ben, tu m (e) racont (e) ras comment ça s (e) s (e) ra, comment ça va s (e) passer toon, séjour !

以上のようにheinのイントネーション特徴は全14例中 (l l) が2例、(h h) が12例であった。これは本コーパスで現れた疑問マーカーのheinは平板型のみのトーンであったことを示している。これによって本研究における疑問マーカーの中で唯一appendixの特徴を持ち得るのがheinであることが分かった。

また、文脈から判断してheinはnonよりも疑問マーカーの前までの要素が、より肯定文としてのステータスに近いことが予測できる。どちらの例においても、YNQを問われた聞き手はOuais (Oui) と答えているが、他のYNQと比較するとあいづちに近い使われ方である。Fontaney (1991) でも疑問マーカーheinは平板型のイントネーションの直後に現れることが多かった。その理由として対話者同士のインタラクションを助長する役割があるとされていた。つまり、Fontaneyのコーパスと本研究のコーパスの結果からheinは聞き手にYNQの真偽を問うための疑問マーカーというより、「肯定文+hein」の形式で意見を主張するディスコースマーカーであるという仮定する方が正しい。

4.5.2.3. ou pas

ou pasに関しては、計10例中で (l l) が2例と (h l) が8例という結果になった。ここから80%の確率で下降調のイントネーションが観察されたことになる。具体的な例で検討していく。

(14) はCDが友人の母親と一緒に日本語を勉強しているという文脈で、MWが「ところで、君たちは一緒に勉強しているの」と尋ねている。(15) ではバカンスの最中に近くで泳げるところがあるかどうかの話題である。SBが「この辺りでプールはある」と尋ねている。YNQに

対する返答は両例とも oui か non で話し手に真偽を与えているという内容である。

(14) MW29 – Au fait vous avez travaillé ensemble ou pas ?

(L.L HL) (L.....L LH) (L...L HH) (h l)

CD30 – ah oui, mais trop ! Sa mère, c'est un tyran. [rire] Non mais elle est trop gentille. Mais en même temps, elle est ferme.

(15) NC97 – Ouais et en même temps y a des fontaines partout.

SB97 –Voilà ee enfin au pire tu piques une petite tête ! [rire][bruits]

(il) y a des piscines par là ou pas ?

(L.....L LH) (Ll HH) (h l)

NC98 – non, je crois pas.

2語で否定辞が伴う ou pas は、今回分析した5つの疑問マーカーで最も下降調 (h l) の特徴を持っている。Prosogramでもピッチ曲線にはっきりと glissando が示されている。上の例ではGIの最終アクセントがLHからHHと上昇調トーンが連続して現れている。つまりHHトーンの文末最終アクセントでYNQとしての性質を作った後に、ou pasと下降調のトーンが続くことで「へ」の字型のイントネーション特徴ができています。

ところで、この「へ」の字型はフランス語選択疑問文 question alternative の特徴に似ている。例えば、「あなたはコーヒーと紅茶どちらが好きですか」という疑問文を尋ねる場合、「Vous aimez le café ou le thé ?」と仏訳できる。この選択疑問文の場合における韻律特徴について Martin (2009) では以下のように説明されている。³³

Vous aimez le café ou le thé ?

↗ ↘

2つの内でどちらかを選ばせる選択疑問文は主に目的語 (le café と le thé) にトーンの上昇・下降が現れる。一方で、疑問マーカー ou pas の場合は以下のような解釈ができる。

Vous aimez le café ou pas (= vous n'aimez pas le café) ?

↗ ↘

このように “vous aimez le café” と “vous n'aimez le café” という2つの節の間での選択疑問文が作られていると定義できる。

33 Martin (2009) の例は筆者により一部変更されている。

4.5.2.4. ou

ou では ou pas に非常に類似した結果が現れた。

(16) MR42 - Et, j (e) vois pas du tout ! *Il y est dans le dessin animé ou ?*

(L..l HH) (l.....l LH) (h l)

LB42 - Non ! Dans le dessin animé j (e) crois pas qu'il y est.

観察された ou のトーンパターンに関して 9 例中 6 例が (h l) のトーンで、3 例が (l l) のトーンであった。(16) は MR と LB がハリウッドに出てくるキャラクターについて話している。そのキャラクターがアニメ版にも登場するかについて MR が、「彼はアニメにも出てくるの」と YNQ を尋ねている。

4.5.2.5. n'est-ce pas

n'est-ce pas の出現は全コーパス内で 2 例のみであったが、フランス語の典型的な付加疑問文は学生を中心とした自由会話の中では頻度が低いということが分かった。また、n'est-ce pas は唯一 non と同じ (l h) のトーンを有している疑問マーカーであった。

(17) A159 - Ne juge pas le la la [rire] capacité d'un PC s'il te plaît à son allure.

B160 - [rire] <à son allure>

A160 - [bruit de chaise] <l'habit> *ne fait pas le moine, n'est-ce pas ?*

(L...l HH) (l.....l LL) (l h)

B161 - Oui, maiiis.

(17) の YNQ は “l'habit ne fait pas le moine” ということわざである。B が画面が厚いパソコンは古くて使えないと言ったところ、A が否定する意図で「見た目が全てではないでしょ」と述べている。

4.6. 肯定文のイントネーション

以上の実験から、フランス語では上昇調でなくても疑問文の YNQ が作られることが分かった。本研究での非上昇調は LL トーンと HL トーンが出現した。この 2 つのトーンは YNQ の文末におけるイントネーションパターンとして定義づけることができるが、一方でこの非上昇調が肯定文のパターンとは異なることを示すことが必要となる。そこで、追実験として本実験のコーパスの 27 対話からそれぞれ条件を満たす肯定文を 1 文ずつ抽出し、そのイントネーションを観察する。

抽出する際の条件とは、まず疑問符 (?) が付与されていないことと、聞き手の返答が oui/

nonのようなYNQに対する典型的な返答ではないことである。下の表7に肯定文のイントネーションパターンを示す。

	非上昇調			上昇調	
トーン	LL	L-L-	HL	HH	LH
頻度	8	8	1	6	4

表7：肯定文のイントネーションの最終アクセント (N=27)

先行研究でも数々確認されているが、肯定文における最終アクセントはLL、HLトーンのみではなくL-L-トーンが観察された。これはMertensによると文末finalityを示す。³⁴

- (18) Enfin on n'a pas ça en France.
(h.l LL) (l.....h HH) (h....l L-L-)

また、同じようにHH、LHトーンの上昇調も観察された。

- (19) Après je suis allé à la bibliothèque pour travailler.
(l.l LL) (l.....l LL) (l.....l LH)

(18)、(19)ともに主語が1人称³⁵で、統語的にも肯定文としての要素が欠落しているわけではない。しかしLHトーンを含む上昇調が観察されたのは全体の37.0%で比較的高い割合で出現した。理由の1つとして、先行研究で挙げられていた、話し手が自分の発話に対する聞き手の修正revisionを予期している場合がある (Marandin et al., 2004)。また筆者が考える理由として、話し言葉による自由会話コーパスを利用しているため、1つ1つの発話が1文として完全に区切られているかどうかの判断ができないということである。つまり、(19)は“travailler”以降も話し手が文を続けるつもりでいたところ、何らかの理由でそこで文が区切られたとも解釈できる。これはMertensがLHトーンに継続(大) major continuationの意味を付与していることから説明できる。したがって、話し言葉コーパスに観察される上昇調肯定文は発話環境などを整えて実験をした場合よりも出現可能性が高いと仮定できるであろう。

34 Mertens (2007), p.11.

35 (18)の“on”は「私たち」を意味する1人称複数人称代名詞“nous”と同等に考える。

5. 議論・考察

これまでの実験を通して、最終アクセントと疑問マーカーについて導き出せる結論を以下にまとめる。

まず、最終アクセントについて、非上昇調イントネーション（LL、HL トーン）と上昇調イントネーション（HH、LH トーン）の割合がおおよそ1:2のとなり上昇調が3分の2となっている。これは先行研究（Grundstrom, 1973）とおおよそ近い結果となった。Grundstrom は知覚実験からも上昇調イントネーションが疑問文と絶対的な因果関係があると結論付けられなかったが、本研究ではYNQにおける上昇調イントネーションの位置づけは比較的大きいことが言える。

しかし、3つの先行研究で共通していたように、フランス語YNQの中での非上昇調イントネーションの割合も決して少なくないことが分かっている。本研究では分析が行われた251文中78文（31.1%）が非上昇調であった。非上昇調の中でも下降調のHL トーンは251文中6文（2.4%）と少ない結果ではあったが、それでも下降調イントネーションがYNQとして母語話者に知覚されたことは確かである。

疑問マーカーについては、本研究で分析された5つそれぞれ固有のイントネーションパターンが観察された。話し手が聞き手に対して自身の意見を強く押し出し、それに肯定すること（oui など）を要求する性質を持ち得る non と n'est-ce pas は（l h）が最も顕著に観察された。これは Maradin et al. や Fontaney の唱えた確認の疑問文 verifying question とは異なると言える。確認の疑問文には基本的に非上昇調イントネーションを伴うことがあるのに対し、non と n'est-ce pas 自体は上昇調で現れている。その上、直前の最終アクセントに関しても上昇調が大半を占めていた。選択疑問文に類似した特徴を持つ ou pas と ou は（h l）の非上昇調がプロトタイプとすることが適当である。この2つに関しては、「へ」の字を描くように、最終アクセントが上昇調でそこから下降するというパターンが特徴である。そのことから、YNQでありながら選択疑問文としてのイントネーションを有することがあると本研究で分かった。

最後に hein の実験結果について考える。hein は14例中12例が（h h）のイントネーションで、Fontaney（1991）とは大きく異なる結果となった³⁷。一方で、直前の最終アクセントに関しては Fontaney でも平板型もしくは下降調が基本形あったが、本研究でも非上昇調のイントネーションは複数回観察された。分析の項で前述したように、hein は他の4つの疑問マーカーと顕著に異なるものである。理由として以下のことが考えられる。1つ目は4.5.2.2.で分析結果が示したように、hein を含む文がYNQと決定してしまうことは極めて難しいということである。そして、2つ目に転写がフランス語母語話者の転写担当者によって変わる可能性である。本研究で観察され分析対象としたものは“hein?”のように疑問符が付与されているもののみで

36 本稿の 4.5.2.3 を参照。

37 本稿の 2.2.1.5 を参照。

あったが、“hein!”や“hein.”と付与されていない場合も多数観察されていた。そこで、疑問符が付与されている発話とそうでない発話を比較してみると、その区別がはっきりとしているとは言い難いと筆者は考えた。しかし、転写担当者が複数いた場合でも、各人の単なる個人差だと決めつけることはできない。コーパスが母語話者によって転写された以上、そこに何らかの共通点がある可能性を残す必要があるだろう。今後は同コーパスの一層の発展とともに、疑問文³⁸を抽出する際の転写の処理方法についても配慮や工夫に努めたい。

38 フランス語話し言葉研究の先駆けとなる Aix-Marseille 大学研究チーム GARS (Groupe Aixois de Recherches en Syntaxe) のコーパス (2005) では、疑問符および感嘆符の「？」や「！」は記号は付与されていない。

6. 結論

本研究ではフランス語母語話者による話し言葉自由会話コーパスを用いて、フランス語 Yes/No 疑問文 (YNQ) のイントネーションパターンを記述することに努めた。実験は音声分析ソフト Praat と韻律分析ソフト Prosogram を活用した音声音響分析によって実施された。コーパスはインフォーマント 2 人での対話でそれぞれが自由なテーマで行われている。対話は主に日常会話やインフォーマント自身についての親密なものであり、統語的に不完全な文は少なくない。それゆえ、YNQ に関しても Coveney の研究の結果同様 SV 型が大多数であった。加えて、実験を通して、文末最終アクセントのイントネーションパターンは非上昇調と比べ上昇調が高い頻度で現れることが再確認できた。それから本実験の結果を分析したところ、文末最終アクセントのイントネーションパターンは非上昇調 (LL・HL トーン) と上昇調 (HH・LH トーン) の 4 パターンに分類することができた。これらの例を文脈を考慮しながら見ていくと、非上昇調 YNQ は先行研究にて明らかにされていた確認のための疑問 verifying question の特徴を持つことがより鮮明になった。

疑問マーカーについてはこれまでの先行研究で言及されてこなかったが、本実験の分析方法に従えば、特徴的なイントネーションパターンの傾向があることが分かった。non と n'est-ce pas は上昇のパターン (l h) が多く、話し手が聞き手に自身の意見を伝え、高い確率でその内容が肯定的なものであることを確認している。そのためこの 2 つは「肯定文+付加疑問文」型と名付けることができる。また、ou pas と ou では「へ」の字型のイントネーションパターンから、「選択疑問」型の特徴と解釈された。一方で、hein は (h h)、(l l) と平板型に限られて出現しているゆえに他の疑問マーカーとは異なる特徴をもつことが分かった。特に、hein はいつも疑問文に伴う訳ではなく、ディスコースマーカーとして聞き手の発話を助長する役割があることも分かった。

本研究を通じてフランス語 Yes/No 疑問文における韻律分析の複雑さと、今後の研究への課題が多数存在することも分かった。まず、本研究の軸であった Yes/No 疑問文の再定義が挙げられる。本研究ではコーパスの転写されたテキストで疑問符と文脈を頼りに YNQ を抽出した。しかし、前章で議論された転写の不統一などの問題は免れない。また、今回は便宜上疑問マーカーと称した文末の appendix のイントネーションに関しては、強さや長さといった韻律特徴を分析方法に組み込むことでより多角的に捉えられるであろう。同様に、今回分析された 5 つ以外の種類を取り入れることで、appendix の特徴をより一層詳細に記述されることが望まれる。

さらに、今回行った文末のイントネーションは文末音節に焦点を当てた分析であった。一方で、疑問文では「主節+従属節」のような構造の場合は、主節にのみ疑問のフォーカスが置かれている。したがって、今後は YNQ の統語構造を更に詳細に分析し、文末だけではなく文中のイントネーションパターンにも注目した研究が課題となる。

参考文献

- Avanzi, M.** (2010) , “Rattachement et fragmentation de la syntaxe par la prosodie”, *Travaux de linguistique* 60/1, Les limites de la rection verbale, 145-166.
- Bartels, C.** (1999) . *Towards a compositional interrogation of English Statement and question intonation*, New York & London: Garland.
- Beyssade, C. & Delais-Roussarie, E. & Marandin, J.-M.** (2007) , “The prosody of interrogatives in French”, *Nouveaux cahiers de linguistique française* 28, 163-175.
- Coveney, A.** (2002) , *Variability in Spoken French a sociolinguistic study of interrogation and negation*, Elm Bank.
- Fontaney, L.** (1991) , “A la lumière de l’intonation”, in *La question*, Kerbrat-Orecchioni, C. PUL.
- Grundstrom, A. & Léon, P.** (1973) , *Interrogation et intonation*, Studia Phonetica, PUF.
- Kerbrat-Orecchioni, C.** (1991) , *La question*, Lyon: PUL.
- Labov, W. & Fanshel, D.** (1977) , *Therapeutic Discourse*, New-York: Academic Press.
- Ladd, R.** (1996) , *Intonational Phonology*. Cambridge: Cambridge UP.
- Leon, P., & Bhatt, P.** (1987) , “Structures prosodiques du questionnement radiophonique”, *Etude de linguistique Appliquee* 66: 88-105.
- Marandin, J.-M. & Beyssade, C. & Delais-Roussarie, E. & Rialland, A. & de Fornel, M.** (2004) , “The meaning of final contours in French”, Ms available at <http://www.llf.cnrs/Gens/Marandin>.
- Martin, Ph.** (2009) , *Intonation du français*, Paris : Armand Colin.
- Martins-Baltar, M.** (1977) , *De l'énoncé à l'énonciation*, Paris : CREDIF.
- Mertens, P.** (1993) , “Intonational grouping, boundaries, and syntactic structure in French”. *Proceedings of ESCA Workshop on Prosody, 27-29 September 1993, Sweden*, 156-159.
- Mertens, P.** (2004) , “The Prosogram: Semi-Automatic Transcription of Prosody based on a Tonal Perception Model” in Bel, B. & Marlien, I., (eds.) *Proceedings of Speech Prosody 2004, 23-26 March*, Nara (Japan) .
- Mertens, P.** (2006) , “A Predictive Approach to the Analysis of Intonation in Discourse”, *Prosody and Syntax*, Kawaguchi et al., John Benjamins, 65-101.
- Schmidt, J.** (1977) , “On so-called ‘rhetorical’ questions”, *Journal of Pragmatics* 1, 4: 375-392.

Sun-Ah, J. & Fougeron, C. (2000) , “A Phonological model of French intonation” in Botinis Antonis (ed.) *Intonation: Analysis, Modeling and Technology*. Dordrecht : Kluwer Academic Publishers, 209-242.

古賀 健太郎、秋廣 尚恵、川口 裕司. 2011. 「Aix 話し言葉コーパスプロジェクト」. 『フランボー』 No.37, 東京外国語大学フランス語研究室, p.37-54.

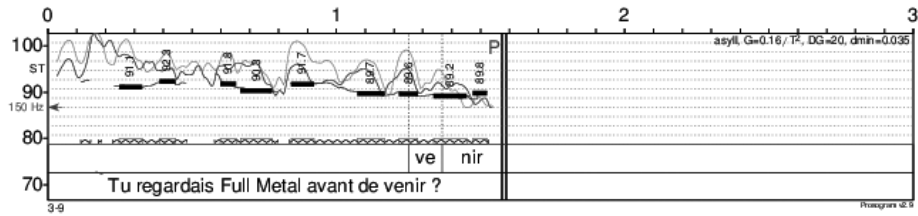
【ソフトウェア】

Boersma, P. & Weenink, D. (2010) , “Praat: doing phonetics by computer”, [Software], <http://www.praat.org/>, Version 5.1. (02 August 2010) .

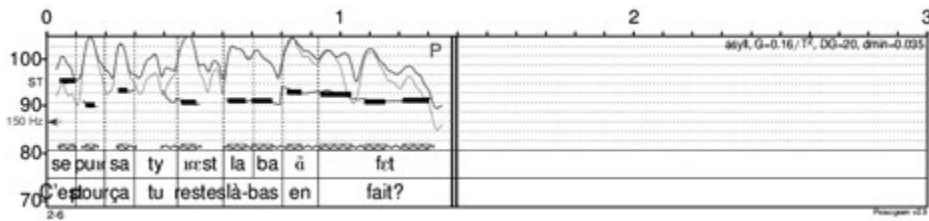
巻末資料

付録1：最終アクセントの音響分析の例（1-8）

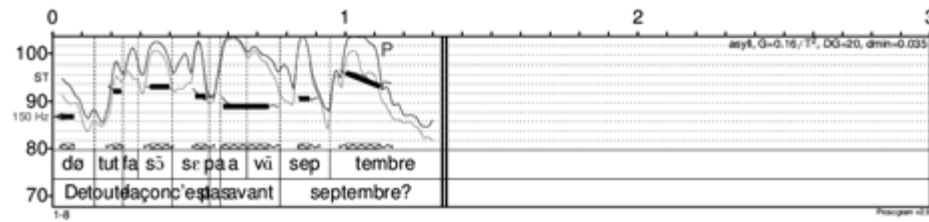
(1)



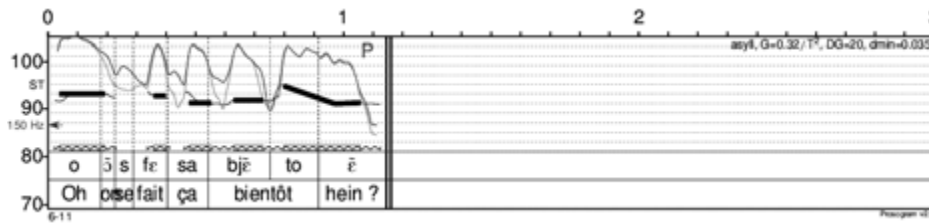
(2)



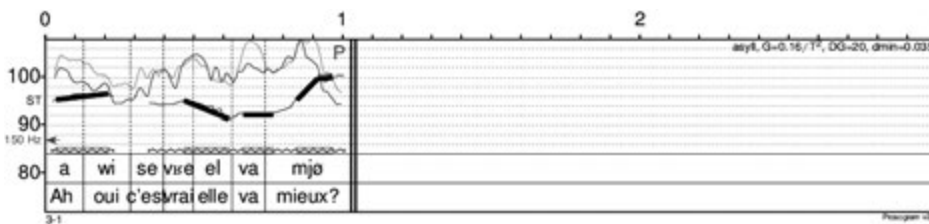
(3)



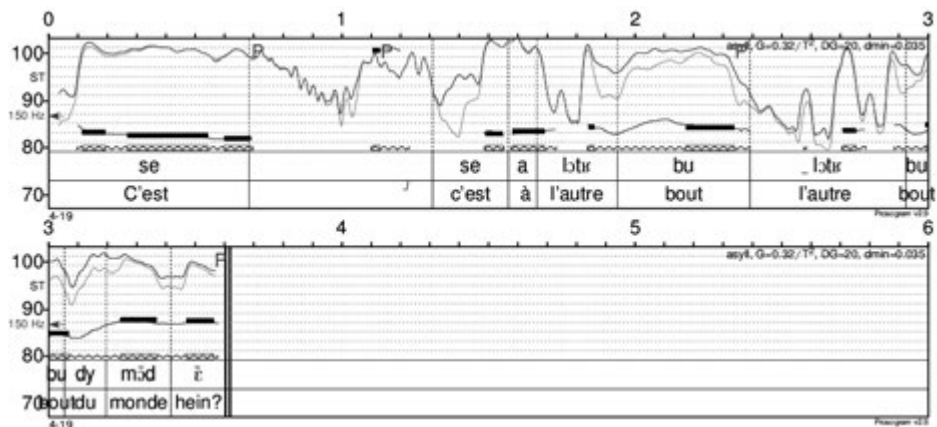
(4)



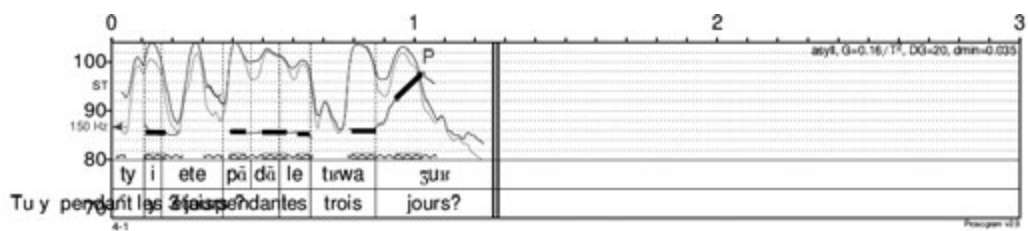
(5)



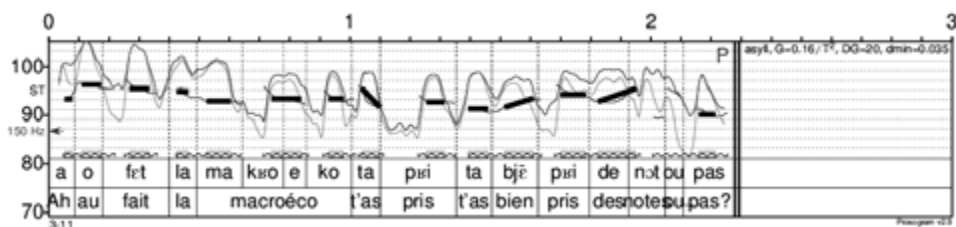
(6)



(7)

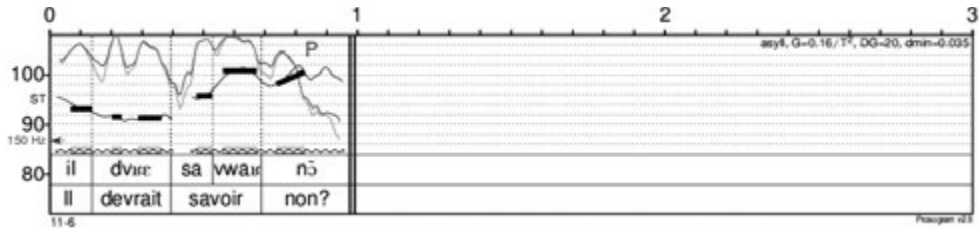


(8)

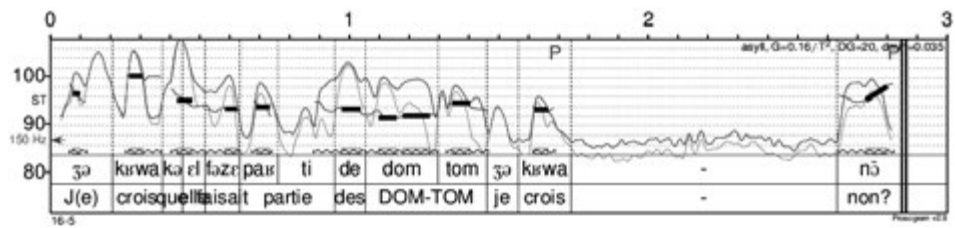


付録2：疑問マーカの音響分析の例（9-17）

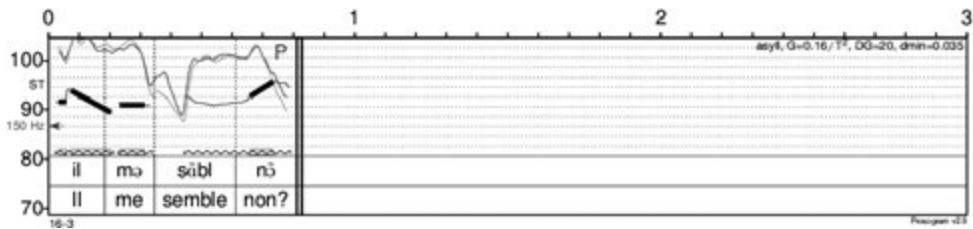
(9)



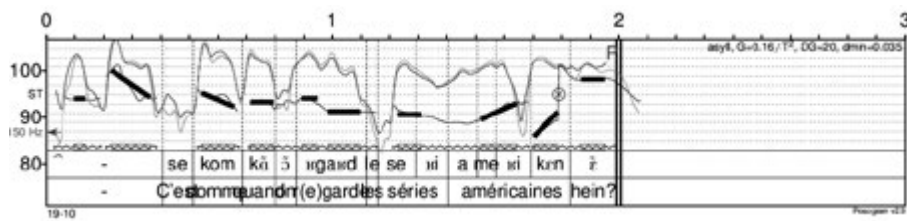
(10)



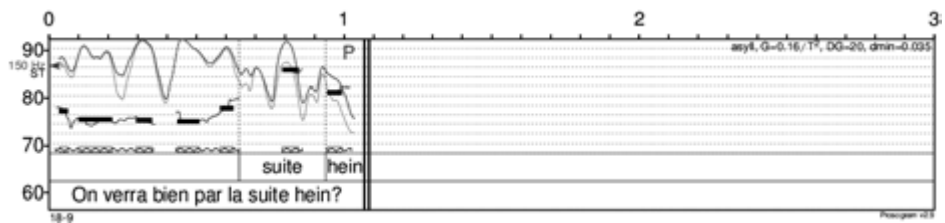
(11)



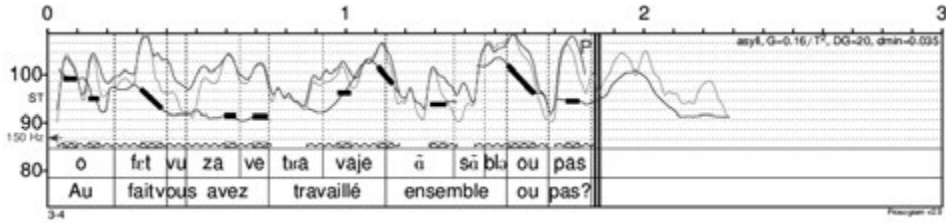
(12)



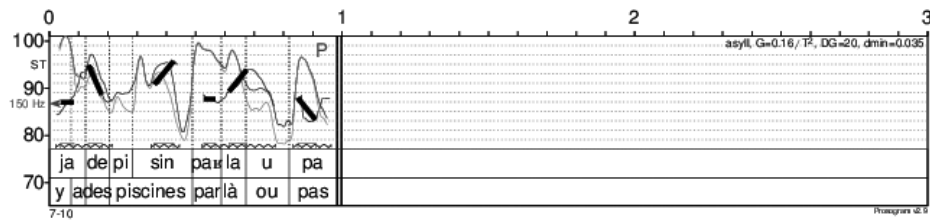
(13)



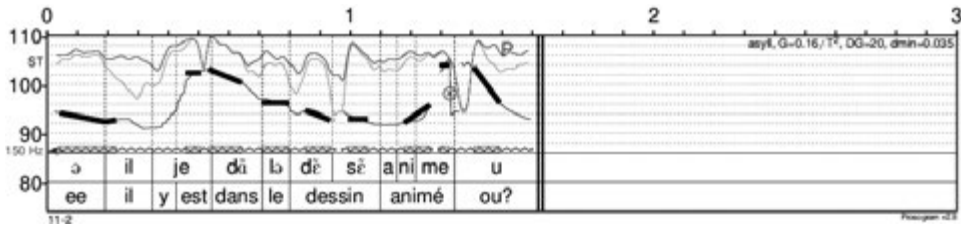
(14)



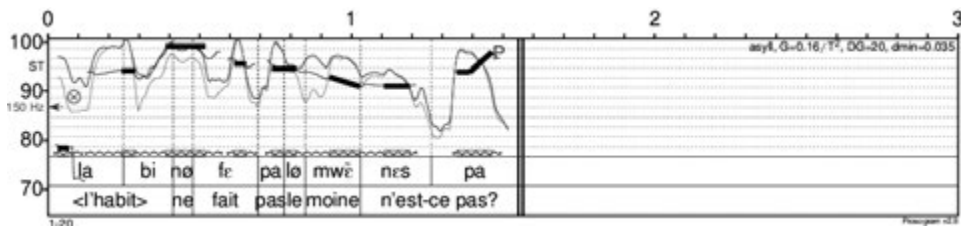
(15)



(16)

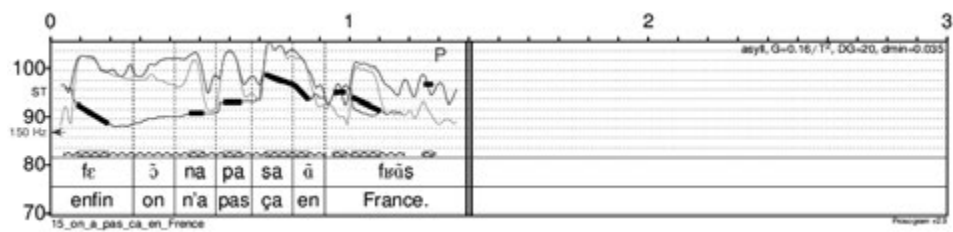


(17)

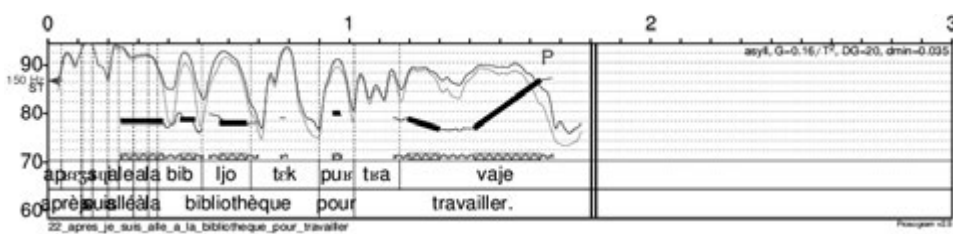


付録3：肯定文の音響分析の例（18-19）

(18)



(19)



謝辞

この度拙稿を執筆するにあたり、終始熱心なご指導ご鞭撻を頂いた先生方へここに深く感謝の意を表します。

主任指導教員の川口裕司教授からは常日頃から細やかな指導を賜りました。他大学出身である私を温かく受け入れ、学部4年の頃からゼミではもちろん、サマースクール、学会発表や研究論文執筆に至るまで様々なことを経験させていただきました。先生にはフランス語、言語学に関する知識だけでなく、「学問とは何か」「外国語を学ぶ意義」を教えていただきました。副指導教員の斎藤弘子教授には英語音声学のゼミで音声学の基礎や発音指導に関して大変多くのことを教えていただきました。本学の益子幸江教授には本研究で実施した実験方法や分析方法に関して貴重な助言をいただきました。また秋廣尚恵先生には授業を通して本研究にも参考になる言語学の文献を多数紹介していただき、改めて言語学の面白さを再認識できました。

最後になりますが、拙稿をご精読いただき誠にありがとうございました。

2018年4月12日